

# 「底が突き抜けた」時代の歩き方 100

## 自衛隊の自殺者急増

8月は沈没したロシア原潜クルスクの乗組員118名全員死亡のニュースが全世界を駆け巡り、日本では数日前に38歳の海上自衛隊の3等海佐が、ロシア大使館の武官に機密情報を流していた容疑で逮捕されるという事件が起きた。新聞報道では防衛庁・自衛隊を舞台にした過去の機密漏えい事件として、80年に元陸自陸将補がソ連大使館付武官に渡していた「コズロフ事件」などが挙げられている。

日本で起こる機密漏えい事件の相手は昭和16年のゾルゲ事件以来、大抵旧ソ連であり、冷戦の影響がそこに生々しく覗き見られるが、冷戦崩壊以降、ロシアと日本の軍隊で起こった先の二つの事件は全く異質であるにもかかわらず、なにか符号めいたものがそこには感じられる。

さて、98、99年と2年連続で自殺者が3万人を越すなかで、自衛官の自殺も多発していることが、特に海上自衛隊の自殺率が突出していることが、00年8月28日付神戸新聞で報道されている。その記事を追うと、60、70年代に年間20 - 30人程度で推移していた自殺者数は、90年代では年間35 - 75人(98年度)となり、海自の自殺者は90 - 94年度の計32人から、95 - 99年度は約2.4倍の76人に跳ね上がっている。自殺率(10万人当たりの自殺者数)も5年間の平均が約35で、15 - 59歳の一般男性の約31を上回り、海自幹部も「異常なペース」と認める。

原因、動機について「不況やリストラとも縁のない職業」であることを考えると、不況やリストラが色濃く反映する一般社会と異なり、自衛隊ではその分だけでも自殺者が減少してもよさそうだが、逆に自殺率が一般社会よりも上回っているところに、「自衛隊」という特殊な場所そのものが大きく自殺原因にかかわっているのが読み取れる。記事ではここ10年の原因分析として、「借財」をトップに「家庭問題」「病苦」「職務」が続き、ほぼ半数が動機は「不明」となっているが、一般社会ではみられない「職務」「不明」という理由こそが、「自衛隊」そのことが原因であるといっているように聞こえる。

自殺者急増の海自では、「閉鎖社会でのいじめ」説が取りざたされている。昨年11月、佐世保基地の護衛艦「さわぎり」の機械室で起こった3等海曹(21)の首吊り自殺について、遺族は「上司のいじめが原因」と主張しており、同艦では98年以降、4人の自殺・自殺未遂が続発している。陸自が99年度に実施した隊員の意識調査では、

約6人に1人が「いじめはある」か「あると思う」と答え、ほぼ同数が「自殺が頭に浮かんだことがある」と告白しているという。自殺者急増、いじめ説から「残る旧軍体質」とか、閉鎖社会での「心むしばむ『病理』」という言説が他人事のように撒き散らされるが、そこで看過されているのは、自衛隊という閉鎖社会が閉鎖社会日本のなかでどのような閉鎖的な位置づけをされているか、という点である。

自衛隊と自殺をセットにして想起されるのは、70年11月25日に東京・市ヶ谷陸上自衛隊を死に場所として決起した三島由紀夫の壮絶な自決（自殺）である。「檄」文のなかで、「われわれの愛する歴史と伝統の国、日本」を「骨抜きにしてしまった憲法に体をぶつけて死ぬ奴はあないのか」と呼びかけ、バルコニー上から「自分を否定する憲法をどうして守るんだ」「諸君は……合憲だかのごとく装っているが、自衛隊は違憲なんだよ。（中略）きさまたちも違憲だ……」と絶叫した三島にむかって、「バカヤロー」「そんな者いるもんか」等の野次が自衛隊員から投げつけられ、「引きずり降ろせ」「銃で撃て」等の罵声で三島の演説が掻き消されてしまうという光景が出現した。

そこからは、「国のために死ねる自衛隊」をモはや「国のために死ねなくなった自衛隊」が真っ向から否定した光景が浮かび上がってくる。だがそのとき、「国のために死ねなくなった自衛隊」という軍隊は、はたして何のために存在するのか、という果てしない疑問の渦中に投げだされていくことになった筈である。兵士としての訓練は怠りなく日々積み重ねられているだろうし、軍事演習も一応はこなされているのだろう。しかし、軍隊でありながら軍隊とは認められていない中途半端な位置は、三島の「檄」文にもあったように、「自衛隊は永遠にアメリカの傭兵として終る」観を呈していることも間違いない。

もちろん、莫大な国家予算を食らっているだけの無用の長物（ちょうぶつ）とならないために、自衛隊も存在理由を求めて必死になっている。奥尻島の大津波、阪神・淡路大震災、そして地下鉄サリン事件、と立て続けに起こった大災害や大事件のなかで活躍してきた。しかしながら、大規模動員できる自衛隊の活躍をさすがと思う一方で、自衛隊の本務は災害救助隊の役割には求められないことも明白であった。大災害や大事件に対応するだけの組織なら、災害救助隊のような組織を創設すれば、もっと効率的に対処できたにちがいがなかった。つまり、自衛隊という軍隊は必要不可欠ではなかったのだ。それに実戦経験の皆無な自衛隊は役に立たない場面も続出したのである。

自衛隊の現場に踏み入って、『兵士に聞け』、その続編『兵士を見よ』を著したノンフィクション作家の杉山隆男は、25万の兵員、1200両の戦車、最新鋭イージス艦、潜水艦など160隻の艦艇、F15、F4らの350機の戦闘機からは強大な軍隊がイメージされるが、それは実力ではないことを誰よりも思い知らされているのが当の自衛隊員であると語っている。`豪華兵器`を揃えても人手不足で訓練もままならない「戦

闘を知らない自衛隊」について、隊員のほとんどは軍隊とは思っておらず、自衛隊以上のものでも以下でもなく、日米共同訓練に参加して、「軍隊の中の軍隊」である米軍を前にすると、「軍隊からできる限り遠ざかろうとしてきた」自衛隊は、自衛隊でしかないと特に痛感するそうである。

隊員たちにとって自衛隊は一つの「就職先」(註 - 教師にとっても学校が一つの「就職先」であり、政治家にとっても議員はいまや一つの「就職先」なのである)であり、せっせと貯金をしてマイホームを買い、サラリーマンより早く訪れる定年に備えて老後の設計を立てている現状をみれば、「極東有事」などは自衛隊の身のほどをわきまえたものではないということになるだろう。だが、隊員自身が自衛隊を軍隊とは思っておらず、一つの「就職先」にしか思っていないくても、自衛隊は軍隊なのである。軍隊としての実力がいくらお粗末なものであったとしても、そのような軍隊であることは紛れもない。日本の戦後社会の中で位置づけられている「日陰者」の軍隊としての自衛隊と、一つの「就職先」として割り切られようとしている自衛隊という場所との落差のなかで、個々の隊員たちは日々勤務しているのである。

『サンデー毎日』(99.12.12)には、大量の自衛官が「顕正会(けんしょうかい)」という宗教団体に入信する事態が起き、「オウムへの舞い」を恐れる警視庁は極秘に「自衛隊信者リスト」を作成したという記事が掲載されている。このような事態も先の落差から発生してくるのであって、けっして一つの「就職先」としての自衛隊から発生してくるわけではない。興味深いのは、この宗教団体が「平成14年までに100万人の信者を達成し、国会を包囲して10万人のデモ行進で憲法(政教分離)を改正し国教化する」ことを目標としており、教団発行の機関紙には海自の防衛大卒キャリア自衛官(97年依願退職)が、「いま防衛庁に、このこと(註 - 国教化のこと)を知り実践する者は我々の他にはなく、平和ボケし、自己保身に終始する現在の自衛隊には、何も期待しておりません。『真の国防は我々の手で』を合言葉に戦ってまいります」と書いている文章が、二十数年前の三島由紀夫の「檄」文と通底する調子を帯びていることである。

「国教化こそ真の国防」という教団の論理は理解しづらいが、「真に国を救うのは、重軍備でも政治外交の手腕でもなく」、ただ国教化以外ないという考えは、三島の「檄」文のなかの「生命尊重のみで、魂は死んでもよいのか」という主張と重なっており、『『破壊と殺戮』をもたらず武力・軍事兵器も、仏法守護の不惜身命の大道念のある者が持つならば、それは正法護持の正しき力となる」という考えは、現行の自衛隊は国教化された日本の下でのみ「正しき力」を有する軍隊になることを示唆しているから、「檄」文のなかの、「天皇を中心とする日本の歴史・文化・伝統を守る」という「日本の軍隊の建軍の本義」に憲法改正によって立ち返り、「真の国軍となる」という趣旨と驚くほど

似通っている。

したがって、上司から「個人的に信仰するのはかまわないが自衛隊の名前は出すな」と注意されても、個人的な問題ではけっしてなく、「自衛官だからこそ仏法に取り組み、立正安国とは何なのかを考えなければならない」という反撥が湧き起こってくるのも当然であり、三島が生死を賭した提言が二十数年後に宗教的な体裁を色濃く帯びて、皮肉なかたちで甦っていることは確かである。宗教的な色彩をまとってであれ、自衛隊員が一つの「就職先」を突き抜けて、自衛隊としての目標を見出そうとしていることは明白であり、一つの「就職先」にもしえなかった自殺の対極に位置しつつあることは間違いない。

「いじめ」ですぐに連想される学校と自衛隊に共通しているのは、その組織集団の存在意義と目標が深く見失われていることであり、日本の戦後社会そのものが存在意義と目標を見失いつつあることの凝縮された淀みを困っている分だけ、より一層閉鎖的にならざるをえなくなり、出口のない閉ざされた球体のなかで膨らんでいく同調圧力の強さは「いじめ」を生み、自殺が飛躍した妄想を募らせずにはおれなくする。自衛隊の自殺者急増は、自衛隊というより一層の閉鎖社会に映しだされる日本の社会のなかで、どこにも行き先を見出せないまま息苦しくなって、自殺へと駆られていく我々の明日をも炙(あぶ)り出していることは疑う余地はない。

2000年9月11日記

過去10年間の自衛官の自殺・自殺未遂件数（カッコ内は死者数）

年度	陸自	海自	空自	合計
90	27(23)	6(6)	9(6)	42(35)
91	42(34)	6(6)	10(8)	58(48)
92	41(28)	6(6)	8(8)	55(42)
93	31(26)	8(8)	10(10)	49(44)
94	43(38)	7(6)	9(9)	59(53)
95	32(27)	16(13)	4(4)	52(44)
96	29(26)	18(17)	10(9)	57(52)
97	48(44)	15(11)	8(7)	71(62)
98	48(46)	18(17)	14(12)	80(75)
99	35(35)	20(18)	13(9)	68(62)
合計	376(327)	120(108)	95(82)	591(517)

